

ひなゆめファンの止まり木

合同小説本 Vol.06

目次

(著者名は敬称略)

本文挿絵…ピーすけ、タツキ

グラヴィティック・ラヴ 著者…春樹咲良 3

歌は心を潤してくれる 著者…羊田ペンタ 8

Stand up, Daisy! 著者…ロッキー・ラックーン 14

紅に染まる頃 著者…kull 28

春に咲く心の桜 著者…ネームレス 32

カードゲーム 著者…RIDE 40

著者あとがき & メッセージ 58

編集後記 65

奥付 65

本書は、「ひなゆめファンの止まり木」における第6回クイズ大会(2014年10月25日)にて上位を取った方々による、合同小説本です。

公開サイト…ひなゆめファンの止まり木

<http://soukensi.net/perch/>

クイズ企画の趣旨説明と結果ページ
<http://soukensi.net/perch/sp/quiz06/>

グラヴィティック・ラヴ

著者…春樹咲良

課題

【離れていても働く力についてレポートを書きなさい】

小学生の頃から数えて通算十一人目となる『夏休みの敵』を倒すため、ヒナギク、千桜の両名に助力を仰ぎとうとアパートを訪れた美希と理沙の「三馬鹿三分の二」コンビ。残る三分の一であるところの泉がハヤテの下でしごかれている一方で、こちらの二人はさらに厳しい道を選んだかも知れないと、自分達の選択を後悔しはじめていた。物理の課題の中に見つけたこのレポートに取り組まされた二人は、揃って頭を悩ませて……もとい、思考を停止していた。

「離れていても働く力……?」

「圧力とか摩擦力とか、実際に触れているもの同士の間で働く力に対して、離れていても働く力というのがいくつかあるのよ」

ポカンとした顔をしている二人のために、まずはヒナ

ギクが説明を始める。

「一つは電気力。ほら、布でこすった下敷きを近づけたら髪が引き寄せられたりするでしょ?」

「もう一つは、磁力な。N極とS極を近づけるとくっつく。N極同士、S極同士を近づけると反発する」

それに続けて、千桜が説明を加える。中学生にも分かるような身近な例を挙げているはずだが、聞いている側の二人の反応がどうにも心許ない。

「じゃあ、もう一つ、離れていても働く力があるんだけど、それは何か分かる?」

「えー、ヒント。ヒントくれよ」

ヒナギクの問いかけに対して、美希がすかさずヒントを求める。少しは考える素振りを見せて欲しいと感じながらも、何もなしに考えたところで時間の浪費のように思われたので、ここはすんなりとヒントを与える。

「そうねえ……じゃあ、ヒント【私たちがこの地上で生活するのに不可欠な力です】」

ヒントと呼べるのか微妙なヒントを受けて、それでも自分たちなりに頭を働かせたのだろうか、少ししてから理沙が声を上げた。

「そうか、分かったぞ！ それは【愛】だ！」

「何の【アイ】よ。虚数単位なんてここでは出て来ないわよ？」

理沙の見当外れの答えに対して、さらに見当外れな返しをしたヒナギクを見て、千桜は呆れた様子でツツコミを入れる。

「それじゃないよ。ロマンティックのカケラも無いな、お前」

「愛か……確かに離れていても働くな」

美希が口元に手を当てて頷きながら言うと、千桜までもが、理沙の答えの妥当性について肯定的に捉え始めた。

「まあ、人間が生きていく上で不可欠というのもそれほど間違いではない……かな？」

「でもここで求められている答えはそんな哲学的なものじゃないと思うの」

ようやく理沙の答えの意味が分かったヒナギクは、ヒントの出し方が悪かったかと思いつきながら話の軌道を元に戻そうとする。

「じゃあもうちよつとヒント」

ここぞとばかりにさらにヒントを求めてくる美希達。

クイズをやっているわけではないのだが、辛うじて勉強に関わるところに興味を持った発言なので、ここはさらにヒントを出すことにする。

「仕方ないわね……。じゃあヒントその2【ニュートンが発見したと言われることで有名】」

それは美希達にとってヒントになり得るのか？ という疑問を隣の千桜が心の中に抱いていると、予想通りに予想外の答えが飛び出した。

「ニュートンって誰だっけ」

「リングの木をへし折って叱られた人じゃなかったか？」

「それはワシントンよ」

「えっ、ワシントンって人の名前だったのか？」

信じられないという表情で美希が聞く。お前の家は政治家じゃなかったのかというツツコミもここでは意味をなしそうにないということスルーしつつ、先に理沙が答えたエピソードもなんだかんだで間違っていることを千桜が指摘した。

「そもそも折ったのは桜の木だ」

「えっ、桜の木を食べて死んだのか？」

立て続けに繰り返される美希の素っ頓狂な解釈に、千桜はヒナギク共々頭を抱えるしかない。

「なんでそうなる……。そりゃ死ぬだろうけどさ。」

もはや全部間違ってるっていうか、なんか別の話が混ざってるよな、それ」

「それで、何の話だったっけ？」

理沙がここぞとばかりに集中力の無さを発揮する。ヒ

ナギクもそろそろ不毛なやり取りであることに気づき始めた。

この二人が真面目に考えようが不真面目に考えようが、まともな答えに至る見通しが立たない。

「だからニュートンって言ってるじゃない」

「神経の話なのか？」

「それはニューロンだよ」

「むしろなんでそんなこと知ってるのよ」

「じゃあ神経が伝える感情の問題なのか？」

またしてもあらぬ方向に話が逸れる。

中途半端に蓄えた知識からミラクルな思考をひねり出すのは、ある意味で才能かも知れないとそろそろ千桜は思い始めた。

一方ヒナギクは、二人からまともな答えを引き出そうとしたのが間違いだだったと、今更のように後悔を始めていた。

「ほら、やっぱり愛でいいんじゃない？」

毒リングゴ食べて死んだ人だって愛の力で生き返ったぞ」
「言われてみれば確かにそうだけど。」

でもあれはキスで生き返ったんだから、【離れていても働く】って定義からは外れてこないか」

千桜はもう諦めて、美希達の考える方向性に無理矢理乗っかって楽しむ方針に変えたようだ。

確かにニュートンも愛は発見したかも知れない。

ヒナギクの方は、無駄を承知であくまでも軌道修正を試みていた。

「そもそも、物理の問題だって言ってるじゃない」

「科学では、私たち人間の心は扱いきれないということか、やっぱり」

美希がまとめるようにもっともらしいことを言ったところで、結局今に至るまで、冒頭の問いから一歩も前進できていない。

「この際、【離れていても働く力】として【愛】を題材にレポートを書かせるのも手かも知れないぞ。今のまとめで締めくくれば読み物としては十分だ」

読み物としてはそうかも知れないが、レポートとして

は恐らく落第点しか返ってこない。

千桜の冗談とも本気ともつかない提案を、ヒナギクはにべもなく一蹴する。

「今の科学で説明出来ないものを科学の理論体系に放り込んだら全部崩壊だわ」

「宿題も一緒に崩壊すればよかったのに」

投げやりな発言をする理沙に対して、ヒナギクが最後通告とばかり、凄みのある笑顔で告げた。

「こんな調子じゃ、あなた達の残りの夏休みも崩壊なんだけど？」

気圧された美希達が言葉を失う中、残りの夏休みの崩壊を回避するための戦いが、少なくとも今日の日が暮れるまで続くことがヒナギクの中で決定された。

それに付き合わされることを察した千桜が、隣で深く溜息をついた。

歌は心を潤してくれる

著者…羊田ペンタ

ようです。今はもうすでに合唱できるよう並んでいます。そこまでの過程がないのは多分気のせいなんだ。

「合唱コンクールですか？」

高校生にもなつて合唱コンなど珍しいなと思ひ、僕、綾崎ハヤテはナギお嬢様に問う。

「ああ。白皇はなんでこども無駄な行事が多いのだ。高校生にもなつて合唱なんて子供っぽいではないか」

「それを13歳のお嬢様が言いますか……」

僕はそう言つて苦笑することぐらひしかできない。僕もちよつとはそう思つちやいましたし。

でも合唱することが決まっている以上、僕は普通に取り組むつもりだし、お嬢様にもそうしてもらいたい。

「まあ、やるからには楽しく歌いましょうよ！お嬢様！」

「………やだ」

予想してたけどやっぱり苦笑いしてしまう。そんな感じの登校中の会話がありました。



時は飛んでいきなり合唱練習となります。

指揮者はヒナギクさん、伴奏は愛歌さんがやつてくれる

「ちよつと待つてもらえるかしら……」

大きいわけでもないのによく通る声でそう言ったのはヒナギクさん。……なんか既に怒つてるっぽいんですけど、なにがあつたんですか!? 効果音聞こえそうなら怒つてるんじゃないですか？

「……そこ、お馬鹿三人組…変な立ち方しないで真っ直ぐ！立ちなさい！」

横の方をチラツと見るとヒナギクさんが言った通り、いつもの三馬鹿が変な立ち方をしていた。ヒナギクさんを怒らせる勇気がある人つてそうそういないから普通に考えたらずぐ分かるね。

変な立ち方って……効果音はそつちから聞こえていたのか！

「ほう、これが叙述トリックというやつか」

「いや心を読まないでくださいよお嬢様。……あの、普

通こういうときふざけるのは男子なのでは？」

「このクラス、ヒナギクいるしな」

「なるほど」

この会話は隣のお嬢様とできるだけ小声で行いました。この雰囲気ですら普通に会話なんて無理でしょ。内容も内容だし、ヒナギクさんに聞かれると……まあ、あれですし。

「でもヒナちゃん！」

「普通に歌うだけではつまらないと我々は考えたんだ！」

「その結果この立ち方をだな……」

「普通に立ちなさいッ！」

「はいいっー！」

そうこうしている間にも瀬川さんたちは怒られている。

いつものことながら三人そろってアホの子だ。あえて怒られるようなネタとしてやっているならともかく、本気でやってそうだから怖い。もしそうならさすがとしか言えない。

しかし、そんなことより僕には気にするべきことがあったのだ。なぜもつと早く気付かなかったのか。

「あの、お嬢様？なんで僕はお嬢様の隣にいるんでしょうか？」

「………はあ？」

いやそんな、何当たり前のこと言ってるのこいつみたいな反応しないで……
明らかにおかしいでしょう。

「ですから、なぜ僕はソプラノパートにいるお嬢様の隣に、僕もソプラノにいるんですか？」

「………どこがおかしいのだ？」

「いやおかしいですよ！僕、男！男ですよ！男！」

「そ、そんなに自分の性別を主張しなくてもそれぐらい知ってるぞ？」

ああ、話が通じない！

「そうじゃなくてですね！なぜその男子がソプラノにいるのかと聞いてるんですよ！」

「そりゃあ、ハヤテは女声だしな。音程的に問題ないというかむしろ男声パートに問題ありそうではないか？」

「くっ……」

そこまで言わなくても……

「でも一人男子が混じってるのはどう考えても変じゃないですか！」

「問題ない、女装すれば」

「綾崎の女装!？」

「変態は黙ってる」

「……」

「ていうかヒナギクさんは僕がここにいるのも何も言わないんですか？」

「別に性別によるパート分けの詳しい規則なんてないし、堂々とその格好で女子に混じってもいいんじゃないかしら」

ヒナギクさーんっ!

だめだ味方がいない!でも男として、こんなのは、こんな恥はイヤだ!

「いやですよ!僕にだって一応男としてのプライドくらいあるんですよ!」

「自分で一応と言っているではないか」

「女声で歌っちゃいなよハヤ太くん!」

こんな調子じゃあこのまま押し切られる……!

「じゃ、じゃああれです!男子が女子に混ざってる変なクラスって評判が広がって……」

「そんなことないんじゃないか?なあ、ヒナギク」

「そうね」

「ときめきのプロなんだし、それなりに人気はあるはずだ!」

「女子の中で目立つのがいやなら女装すればいいんじゃないか綾崎!」

「逆に男子が女声で歌うという特異性で高評価になるかもしれないな」

「最優秀賞とかとれるかもしれないぞ!」

「もしかして賞金とかあるの!?!だったら綾崎くんには女声で歌ってもらって高評価をとってもらわないと!」

「そう言えば綾崎くんって男装癖のある美少女って噂もあつたよね」

「いつから男だと錯覚していた?」

「綾崎!もう乗るしかない、このビッグウェーブに!」

「シャーシャーッ!」

「わー！女っぽいやつが怒ったぞー！」

「お嬢様と三馬鹿はいつも通りだからまだあれですけどいい加減にしてくださいよ！女声とか一部事実は混じってても大体は適当に言いくるめようとしてるだけじゃないですか！まず僕は普通に男性パートで歌いますから！途中からヒナギクさんまでそっち側でしたけど僕にそんなに女声で歌ってほしいんですか？いやなんで！それから僕は女装もしません！最初に虎鉄くんには黙ってるって言ったよね？何途中から参加してんだよ気持ち悪い！あと賞金が出るなんて誰も言ってませんからねダメなひまわり先生！っていうか途中から誰が喋ってるのかもわかりませんでしたよ！せめてそれぐらいはどうかしてください！」

ふう、疲れた。マシンガンのように喋ったよ。これセリフの頭に、それは違うよ！とか入れたらよりいい感じになるかな？ならないですね。はあ、疲れた。大事なこともないけど二回言いました。あと若干みなさん引き気味なのは気のせい。

その止まった時の中で最初に動き出したのはヒナギクさんだった。

「練習始まらないわよ。いつまでくだらないことやってるのよ、ハヤテくん」

「責められるの僕ですか!？」

ヒナギクさんもしれっと参加してたくせに……。災難だよ……

◆

練習はバカ三人組の妨害が入りつつもしっかりと進めることができました。そして下校なう。

「歌ってやっぱいいと思いませんか？お嬢様」

「いきなりなにを言うのだ。合唱なんかのどこがいいのだ？」

「合唱に限ったことではなくてですね、綺麗な音楽を聴くと感動しますよね？っていうことです」

感動と言っても別に号泣したりはしない。心が浄化されるというか。

「ずいぶん教師っぽい……まともな教師っぽいことを言うんだな。綺麗な匂いがするぞ？」

まともと付け足したのは反面教師ではない普通の教師ということ表現してるのかな(棒)

「そうでもないと思いますよ？だって音楽で心を動かされる人がいなければ、ルカさんみたいな職業の方なんて一人もいませんから」

「ん、そう言われると否定もしづらいな。確かに音楽はいいものかもしれないな。だって『歌はいいよね。歌は心を潤してくれる』とかどっかのホモっぽいのも言ってたし」

「ホモっぽいって……。あとハンティングゲームでも最後は世界が救えたりするほど歌の共鳴力はすごいんですよ」

「それならアイドルが旧悪魔を歌で弱らせるOVAとかもあったな」

「最近アイドルと書いて能力者と読んだりもするそうですし」

「でもやっぱ有名な能力といえどゴムゴムだな」

「スタンド能力も捨てがたいですけど」

「……なあハヤテ」

「何でしょうか？」

「なんの話してたんだっけ？」

「……なんの話でしたっけ？」

「あゝあ…これじゃしばらく帰れないかな…？」

シトシトと落ち続ける雨。それを私は校舎の昇降口から眺めることしかできなかった。

迂闊だった。けさは雲ひとつ無い快晴。まさか雨が降るだなんて、思ってもみなかった。お気に入りの折りたたみ傘は数日前に使った後、乾かしてから部屋に置きっぱなし。今日に限って、いつも見ている天気予報をスルーした朝ののきな私を心から恨みたい…。

「小降りになるのを待つしかないわね…」

今日は生徒会の会議の後、私は資料の整理のために残っていた。はじめは他の役員メンバーも手伝ってくれていたけど、ひと段落して私一人でも片付けられる所まで進んだら全員帰ってしまった。私個人のための資料整理もあったから、あんまり手伝わせるのも申し訳なかったと思っただから。

ちなみに普段なら部活のある生徒がいる時間ではある

けど、今日に限って大きな職員会議があったため、全校単位で部活が休みだった。生徒会だけはその例からは漏れる形となったのだった。

以上の理由のため校舎には誰もいなく、私の独り言だけが寂しく響くだけ…。自分だけが世界から取り残されたかのような孤独感。なんか久しぶりな感覚。帰れないことには確かに困っていたが、一方でそれを楽しもうとさえする自分が存在した。

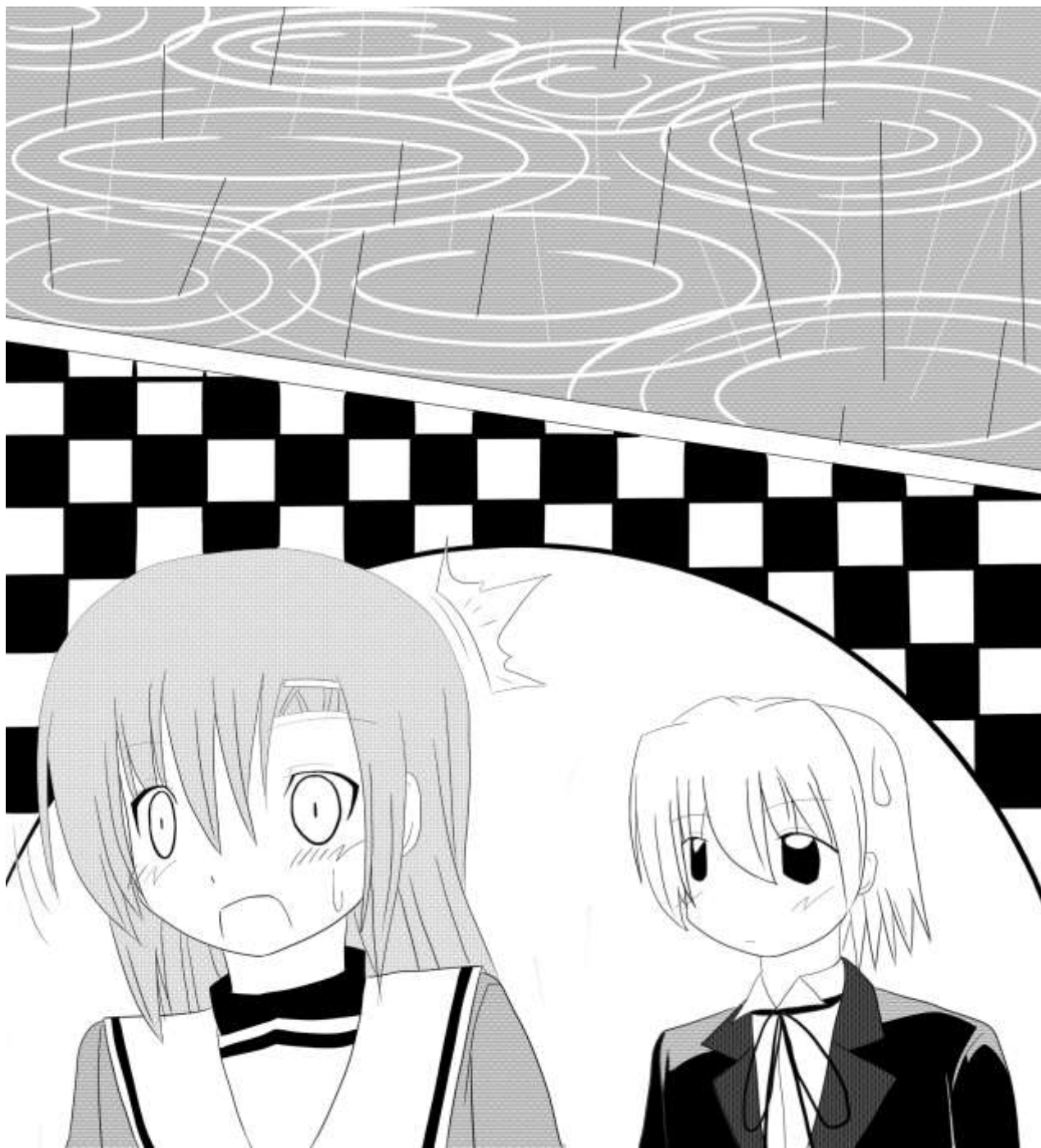
ふと、実の両親に捨てられた時のことを思い出した。こんなこと、いつぶりになるのだろう…？コレに関しては何度思い返しても、やっぱり寂しくて辛い。

「あれ!? ヒナギクさん。どうしたんですか…？」

「フェツ!!」

急にかげられた声に、私は肩をビクリと震わせ奇声をあげてしまった。そして、その声の主を見るために慌てて振り返った。

振り返ったのは、声の主を「いち早く見るため」であり、「誰であるのか確認するため」ではなかった。こうやって私が辛い時にいきなり現れる人なんて決まってるから、確認をする必要が無い。



「は、ハヤテ君!」

「生徒会で居残りですか?いつもいつも、ご精が出ますね!」

「こんな時間にどうしたの:!?」

誰もいないはずの校舎。それは彼も例外でないはず。ココに彼がいる理由が分からなかった。ひよつとして、ホントに私が困ってたから:??

「いや、一度帰ったは良かったんですが、ロッカーに財布を忘れちゃって:。他の物なら別に明日でも良かったんですけど、コレばかりは取りに戻らないといけませんからね」

「そうなんだ:。それで、お財布は大丈夫だった?」

「ええ、おかげさまで。ロッカーにはカギがかかっているで:」

「それは良かったわね」

とまあ、そう都合の良い話なんかは無い。とりあえず彼の忘れ物が無事だったのは一安心。

話は変わって先程の続きになるけど、最近は両親に捨てられた時のことを思い出す際には、必ず一緒に思い出

すものが出来た。それは、16歳の誕生日に時計塔のテラスで彼が見せてくれたあの笑顔と、「今いる場所(ここ)はそれほど悪くはない」という言葉。

これらのおかげで、両親の事を思い出すのがそこまで辛くなくなった。

もっと言ってしまったえば、今の私というものは、あの経験無しには存在しないという事を、頭と心の両方で理解できたのだ。

話を戻しましょう。ナギを連れていないハヤテ君と会うと、私はいつもなら「一緒に帰れるかも」とか「ちょっと話していけるかも」とか色々浮かれてしまう。悔しいけどこれは事実。しかしながら今日の私は、どうやって傘も持たずに立ち尽くしているのをごまかそうかという事しか考えていなかった。うまく傘の話題にならないような展開に持っていけないと:!!

「:あれ?ヒナギクさんは折りたたみ傘ですか?」

「え!」

相変わらずこんな時だけは鋭い。どうやら彼の脳内では「雨降りの中、傘を忘れて立ち尽くす桂ヒナギク」と

「このイメージは再生されなかったようだ。普段の自分の行いがそうさせている事が分かるので、悪い気はしない。それでも、好きな人が自分の現状を察してくれないとなると…やっぱり少し寂しい。」

「え、ええ。ま、まあそんなトコよ！」

「そーですか。では、一緒に帰りませんか？」

「!？」

本当にこんな時に限って、私が一番心の中で求めている事を言ってくれる。普段ならせいぜい「そうですか、ではお先に」くらいしか言ってくれないのに…。嬉しいけど、つい今しがた発してしまった自分のつまらないプライドを守る一言が足枷になって、うまく返せない。

「……」

自分でもハッキリと分かるほど顔が火照っている。ただ「傘を忘れた」って言うだけなのに、私という人間はどうしてこんななんだろう…。

「…す、すいません！無理に誘ってしまって。じゃあ僕はコレで!!」

「あっ…」

ハッキリしない私の態度を拒絶とみなしたのか、ハヤテ君は申し訳無さそうに去ろうとした。

そう、「去ろうとした」のであって、「去った」のではない。なぜ？それはカンタン。私が彼の腕をつかんだから。

「えっ!？」

「あっ…ゴメンね。私…」

つい。ホントに手伸ばしてしまった。彼もおそらく私がそんな行動に移るとは思ってもみなかっただろう。多分…普段なら、そのままその恋しい背中を見送っていたシーン。なぜ今日に限って引き止めたのかわからない。そんな事はどうでもよかった。ただ、つかんだ彼の腕のぬくもりが、私のつまらないプライドを溶かしていくように感じた。

「私…傘、忘れちゃったんだ。ゴメン、嘘ついてた」

「え!? そーだったんですか?」

「うん…」

「ああ…そーですよ。朝は良く晴れてましたからね」

言えた。言えたじゃないの、桂ヒナギク。そんな簡単な言葉ひとつのために、一体どれだけつまらない意地を張ってたのやら…。

「だから…」

「だったら僕の傘を使ってください! 男物ですけど、大きいから濡れにくいと思います」

「えっ!?」

私がつかんだ腕とは反対側の手に握られた黒い傘を彼は差し出す。面食らった私は、差し出されるままにその傘を受け取ってしまった。もちろん、私が発しようとした言葉はそんな事の催促ではない。

「僕だったら走って帰るから、大丈夫です! それじゃ…」

「待って!!」

「!?!」

「またも走り去ろうとした彼の腕を、私は先程より強くつかんでいた。普段の私らしくない行動に、明らかに彼は動揺していた。」

「えっと…?」

「ハヤテ君、あなたの優しさはすごく…ものすごく嬉しいけど、人の話は最後まで聞きなさい」

彼の大きめの傘を開き、その中に互いの身体が入るようになした。ひとつの傘に二人の人間…そう、「あいあい傘」の状態だ。

「こうすれば、二人とも濡れないでしょう?」

「ヒナギクさん…」

「ハヤテ君が私を気遣ってくれるのはホントによく分かるわ…でも、私だって同じくらい貴方の事を想ってるの。だから、『相手さえ良ければ自分なんてどうでもいい』だなんて思わないで!」

「……」

私の言葉に、うつむき押し黙ってしまうハヤテ君。その表情も、その意思も、私には見えなかった。勢いに任せてマズイ事を言ったかしら…？

「そうですね…。そうですねっ!!」

「ハヤテ君!？」

しかし意外にも、顔を上げた彼の表情は爽やかな笑顔だった。驚きもしたし、傷つけてなかったようなので、ひとまず安心した。

「いや、目が覚めました。」

「ん!？」

「ハハ…コッチの話です。じゃあ帰りましょうか。傘は僕がお持ちしますね!!」

彼はひよいと私の手から傘を奪い、少し私寄りになるように差した。それについて、私は何も言わなかった。彼の心境の変化(？)が分からない私は、その明るい口調にただただ首をかしげるばかりだったけど、笑顔になれたのならそれでいい。深くは考えなかった。

誰もいない学校の広い敷地を一組の男女がひとつの傘

で歩いていく。多分、いつもなら恥ずかしくて頭の中がグルグルしてしまうところなんだろうけど、今日は不思議と落ち着いている。

「あの、ハヤテ君…」

「なんですか？」

「傘に入れてもらおう身なのに、偉そうな事言って…ゴメンね」

◆
思い返してみれば、「一緒に傘に入れて」と言おうとしただけなのに、随分と偉そうに…しかも小恥ずかしい事まで言ったものだ。こういうところが女の子らしくないと言われる所以なのかしら…？

「ヒナギクさん、さっき…僕の『優しさ』って言ってましたよね？」

「え…？う、うん」

私のお詫びにたっぷりと間を置いてからのハヤテ君の言葉。その返事が来るかと思いきや、彼が発したのは予

想外の質問だった。

「アレは僕がよかれと思っただけですけれど、結局ただの押し付けだったんですよ」

「押し付け……？」

「はい。ヒナギクさんの気持ちを無視して、傘を渡して僕だけが満足して帰ろうとしてたんだなって……」

「!!」

納得がいき、私はふむふむとうなづいた。なるほど、彼はさっきのやりとりでそんな事を考えていたのね。自分の想いが届いたような気がして、ちよつと照れくさいけど嬉しい。

「今思えば、ずっとそんな風にやってきてたんですよね。よかれと思っ……」

「ずっと？」

「はい。小さい時からずっと……。僕が人に関わると、後からその人に親が迷惑をかけてしまうんで……」

「……」

「だから、あげられるものは全部、自分は何も求めない……それが正しいんだって思っていました」

雨の降る空の彼方を見るハヤテ君。その彼が歩んできた過去……尊敬する両親を愛してやまなかった私には到底想像もつかない。ただ、小さい頃から作りものの笑顔で他人と接してきた彼を想像すると、どうしようもなく胸が痛くなる。

「でもそれは『優しさ』なんかじゃなくて、自己満足……だったんだって、気付いちやって。そこは普通なら落ち込むところなのかもしれないけど、なんか妙にすがすがしくなっちゃったんですよ……」

「……そうなんだ。」

「はい。それは多分、ヒナギクさんの優しさが本物で……『強さ』だと分かったから」

「強さ？」

「ええ。人と人との繋がりの中で妥協せずに他人を想い、それを伝える……頭では分かっていたとしても、なかなか出来る事ではありません」

「妥協せず……かあ。確かにそうかも」

彼の放つ言葉は、その一つ一つが絶妙に納得できるものだった。確かに、どんなに仲の良い者同士でも、本気

でその人の事を想って言ってあげるといふことはなかなか難しいと思う。実際、私は美希・泉・理沙の三人に対してはかなり諦めの入った部分もある。もちろん彼女たちが本気で困ってる時は全力で助けるし、助けられた事も数え切れない程にあるけど…。

お姉ちゃんは、お酒にお金に先生としての態度に…もう諦めてない部分の方が少ない。尊敬はしてる。これはホント。

では逆に、歩から見た私はどうかしら？いつまで経ってもハヤテ君に対してモジモジして動き出さない私（自覚はしている）には、ほんとと呆れているだろうけど、それを言われた事は無い。

「いやあ、僕もお嬢様の事を本気で想えば学校をサボるのはダメだって、もつとちゃんとやるハズなんですけどねえ…」

「私も、お姉ちゃんの事を想えば、ムチ打ってでもあのグータラな生活態度を直せるハズよね…」

お互いに苦笑する。まあ、どんなに相手のことを想おうが、最終的に動くのは、その相手なのだ。想いが届かない時もあれば、届いたとしてもそれを行動に移せない

事だってある。だからこそ、彼が私の想いを受け取ってくれて、納得してくれた事が嬉しい。

「まあその話は置いときまして…今日はヒナギクさんのおかげで、大切な事に気付きました。ありがとうございます」

「…ううん。私の方こそ、ありがとう」

その表情。私以外の人にとっては、ただの笑顔かもしれない。だけど私にとっては特別。毎晩毎晩、寝る前に枕元で思い浮かべている…夢にまで出てくることだがある。その笑顔を見るたびに私はときめき、また少し彼のことがスキになる。

「やっぱり…好きなのよね…」

「ん？なんですか？」

「ううん、独り言」

先程よりだいぶ弱くなった雨音に重ねて呟く。もちろん、彼には聞こえないように。頭では常々分かっていた事だけど、口に出さずにいられたかった。

「あつ！あのコンビニが見えたら二つ目の角を右でしたよね？」

「うん」

ちなみに、彼は私を家まで送ってくれると譲らなかつたので、その厚意に甘える事にした。私が三千院家までお邪魔して、傘を借してもらえようお願ひしても良かったんだけど、それだと結局のところ返すのに二度手間になつてしまうという事での結論だつた。

今いる地点から私の家まで、もうわずか。いつもならいやに長く感じる道のりも、彼と一緒にだつたあつという間だ。もう少し、あと10分：あと5分でもいい。このままでいたいな…。

「あれ…?」

「?」

「雨、止んじゃいましたね」

「あら…ホントだ」

色々と考えにふけていたから気づかなかつた。さつきまでのドンヨリした空とはうって變つて、沈んでしまふような夕日が顔を出している。彼は掌をのばして雨

が降っていないのを確認すると、傘をたたみ雫をはらつてからボタンを閉じる。「あいあい傘」が名残惜しかった私は、あえて傘をさしているときと同じ距離感を保つた。今日の私はなんだか積極的ね…。彼もそれに構わずそのまま進む。傘が不要になつても、ちゃんとウチまで送ってくれるあたりは律儀だと思つた。

雨上がりの空は好き。ぽつりと浮かぶちぎれ雲が夕日と重なつて、とても綺麗。いつもなら、ただただイヤなだけのはずの水たまりも、彼が隣にいるからか、跳び越えて進む。家までの残りわずかな道も、私にとっては何度も二度と経験できないかもしれないような…大事な大事な帰り道だ。

「着きましたね」

「うん」

無事に家に着く。やっぱり楽しい時間はあつという間に終わつてしまふ。私は門に背を向け、彼と正対する。

「今日はホントにありがとう！ハヤテ君がいなかつたら、私…今頃ようやく学校を出てたかも…」

「いいえ、このくらい。というか、やっと一ついつもの

お礼が出来た感じですよ。それに…」

「ん？」

「今日は多分これからの人生が変わるくらい大事なことを気付かせてもらいましたし…って、これじゃまたお世話になりっぱなしですね。ハハ…」

自嘲気味なセリフとは対照的に、その笑顔はとても晴やかだった。自然と私も笑みがこぼれる。

「ウフフツ…じゃあまた傘忘れたらお願いするわね」

「ヒナギクさんが二度もそんなミスしないと思いますけど…その時は任せてください!!」

「むく!私だって、同じミスを繰り返す事くらいあるのよ!じゃあ今度から雨が降ったら毎回迎えに来てもらおうかしら…」

「えっ、僕は全然構わないんですけど…お嬢様もいますし…」

「もうっ!ハヤテ君たら、冗談よ…」

と言いつつも、「全然構わない」のくだりにはガツポーズが出るほど嬉しい私だったりする。「やっぱり本気だ」って言い直そうかしら…?

あっと、いけない。いつまでも話していたけれど、彼の帰りを待っている人たちもいる。私一人のわがままで、彼女たちに心配させてしまうのも申し訳ない話だわね。

「あ、ごめんなさい。こんなトコでいつまでも話してられないわよね」

「いえいえ、僕だったらいつまでも大丈夫です。」

「…ホントは？」

「お嬢様の機嫌がどんどん悪くなります…」

「もうっ…」

本当にいつまでも大丈夫だったら、私が彼を帰す事は無いだろう。でも、そんなのはあり得ないから、本当の事を言ってくれる方が嬉しい。

「じゃあ、また明日ね。今日はホントにありがとう!」

「いいえ、こちらこそ。…では!」

笑顔で彼を見送る。彼も笑顔を返してくれる。私の大好きな笑顔。その背中がだんだんと小さくなっていつてしまう。

本当は叫びたい…。「好きだよ」って。その背中に、聞

こえるまで何度でも。今の私にはちよつと…いえ、到底無理。それでも、今は無理だとしても、いつかきつと…。

そのときには、あなたは私に笑顔で応えてくれるのかな…？

【おわり…？】

「いつか」って、いつ？明日？1週間後？1カ月後？1年？高校卒業までに？それとも死ぬまでに？

本当の本当に、明日も彼と会える保証なんてある？自分の両親とですら、いつでも会える保証が無いという事を知ってるでしょう？スキになったら、それが消えてし

まうかもしれないんでしょう？

じゃあ、なんでやらないの？恥ずかしいから？心の準備が出来てないから？拒絶されるのが怖いから？自分から言ったら「負け」だから？

違う。今を精一杯じゃなくて、幸せになんてなれるもんか。

後悔なんてしたくない。だったら、今やらないでいつやるっていうの？少しくらいワガママ言わないと、幸せをつかみ損ねちゃうんでしょ？あの背中を追いかけて追いかけて、追い越しちゃうつてくらいに走らないと…

「好きだ」って言う代わりだなんて、存在するワケないじゃない！そうでしょう!!桂ヒナギク!!

気付いたら走り出していた。

ああ…なんでこんな簡単な事に気付かなかったんだろ？でも逆に、ココで気付いて良かった。彼はまだ私に見えるところにいる。まだ追いつける。手遅れになるにはまだ早そうね。不器用でもヘタクソでも泥臭くても構わない。私の想い、真っ直ぐに伝えてみせる。



「ハヤテくーん!!」

だんだんと大きくなるその背中に呼びかける。私の声に気が付いた彼は、歩みを止めてこちらに向き返る。

私これから取る行動に対しての結果や、その後の事を考えると、やっぱり怖い。引き返したい。

でも、明日何があっても…例えば、彼と二度と会えなくなってしまうとしても後悔しないように、今出来る事をしなくちゃいけない。自分に言い訳して、「今」から目を逸らして過ごす私とは決別する。

「私ね…」

あとは、彼に届いて咲き誇るのを祈るだけ。私の気持ち、最高の笑顔であなたに伝えます。

【おわり】

「ヒナギクさん、どうしましたか!?何か忘れ物とか…?」

「はあ、はあ…ゴメンね、引き止めちゃって。言い忘れてたというか…伝えたいコトがあつて」

「ん?なんでしようか?」

「うん。笑わないでね…」

果たしてこのやり方がベストなのか私には分からない。ダメだった時はメチャクチャ落ち込むだろうけど…。それでも、きつと後悔はしない。自分で考えて行動した上でこの事だから。それが一番大切だと思う。

紅に染まる頃

著者：kull

「秋と言えば？芸術の秋、読書の秋、そして、食欲の秋だ〜！」

「・・・どうした、いきなり大声を出して。」

九月中ごろの日曜日。一人漫画を読んでいた千桜の部屋にナギが飛び込んできた。

「何を思っってこんな天気の良い日に部屋で漫画なんて読んでるんだ！引きこもりか！お前は！」

「・・・平日も引きこもってる奴に言われたくないけどな。・・・で、何の用だ。」

「さっきも言っつたら！秋と言えば、芸術の秋、読書の秋、食欲の秋だっつて。」

「だから、それがどうしたって言うんだよ。」

「決まっている！そろそろ紅葉も染まってきた頃だ、今から秋を満喫しようじゃないか！」

「・・・で、どうして居間でペンを持ってるんだ？また新しい同人誌でも作るつもりか？」

「違うわ！芸術の秋、それはつまり私の内なる才能を呼び起こすにはうってつけの季節。だから、今から新しい漫画を作る！」

やれやれ、と千桜はナギの隣に座る。

ふと外の方を見ると、ナギが言っていた通り葉は少しづつ紅に染まってきている。

（銀杏か・・・。あれ、散らばってるのを掃除するの大変なんだよな〜）

たまにボランティア活動として落ち葉を掃除している生徒会の一員の千桜としては、銀杏は見かけの綺麗さよりも後始末の面倒さの方が目立った。

「・・・ま、この庭はマリアさんとか綾崎君がやってくれるんだろうけど。」

「何を独り言を呟いているんだ？漫画が出来たから早速読んでみてくれ！」

「はいはい。・・・『私はこの世から秋を無くすため

に生まれた秋消しのウインド!』……おいおい、どこ
の火消しだよ。もうこの時点で意味が分からん。」

「うっさい!最後まで読め!」

「最後まで読めって言うってもこの短時間じゃそんなペー
ジ数ないだろ。……はい、読み終わった。」

「感想は?感想は?」

「新たな感性を生み出しているという点ではいいんじゃないか?私には意味不明だったけど。」

「だー!!誰が意味不明だ!私の高すぎる芸術性にお前が
付いてこれないだけだ!次行くぞ次!」

「……次は大型書店か。」

「読書の秋だからな、何かいい本を読もうと思う!」

「普段は漫画ばっか読んでるくせに……。」

さっさと店の中へ入ってしまったナギに続き、千桜も面
白そうな本を物色し始める。

(ま、私も普段は漫画以外の本はあまり読まないから
な……。たまには小説でも探してみるか。)

最新の人気本、ドキュメント、SF……色々なジャ
ンルのコーナーを歩き、千桜が止まったのはミステリー
のコーナーだった。

(ん、この本なんかいいんじゃないか?)

『想像は人を喰らう。観念の産物である龍が、人間を腹
の底に呑み込もうとするように』

そう帯に書いてある本は少し前の本だったが、千桜はそ
の変わった紹介文が気になった。

「雨がキーワードとなるミステリー……これは面白そ
うだな。」

千桜は本を手に取り会計を済ませナギを探すと、案の定
漫画コーナーで立ち止まっていた。

「お前の言う何かいい本っていうのは漫画のことなの
か?」

「ま、漫画だって本の一種だろ!……ん、お前の持
ってるその本は何だ?」

「これ？さつき面白そうなミステリーがあったからちよつと買ってみた。」

「なんだと!? 私より先に本を買うなんて許せん! もういい、さつきと帰るぞ!」

「……おーい、お前の好きな漫画の新刊、買わなくていいのか?」

「……それは買う。」

「まったく……。」

「……で、結局食欲の秋か。」

「いいだろ! こんな美味しそうな匂いがしてるのに耐えられるか!」

本屋から二人が帰ると、ハヤテと MARIA は庭で秋刀魚を焼いていた。

千桜が聞いたところによると、咲夜からの贈り物らしい。

「しかし、わざわざ七輪まで用意して焼くとは……。」

「ふふ、こっちのほうが風情があつていいでしょう? お昼頃にナギが食欲の秋だー、なんて騒いでいたので便乗

しようかと。」

「食欲の秋だけではないぞ! 今日には芸術も読書もしっかり堪能したのだ!」

「……どっちも中途半端だったけどな。」

「ほっとけ!」

千桜がお椀を片手に美味しそうに食べているナギを横目に見ていると、ハヤテが何やら豪華なものを持ってきていた。

「MARIA さくん、なんかこんなまで入ってましたよ。」

これって松茸ですかね?」

「あらあら、そんな物までくれるなんて咲夜さんも太っ腹ですわね。早速焼いてみましょうか。」

(松茸……は流石に私もちよつと食べたいな。)

珍しい高級食材にわくわくしていると、千桜は足元に落ちてきている銀杏に気が付いた。

(銀杏か……。好きじゃなかったけど、この雰囲気と一緒なら好きになれるかもな。)

春に咲く心の桜

著者…ネームレス

私は恋をしていたのだと思う。

それはいつからなのか、自覚したきっかけはなんのか、それは全くわからない。

だけど、一つだけ言えることがある。

私は、春風千桜は、綾崎ハヤテという一人の少年に恋をした。

もし、強引にでも恋した理由を言うのであれば、語るのであれば、それはただ単純に一緒に暮らしていたからだろう。

最初は普通だった。なにが普通かと問われれば、言葉で表すことは難しい。しかし、私の中でなにかが変わって行っただ。

友人であるヒナの恋を応援する意味でも何度か綾崎くんに近づいたことはある。

でも、いつ頃からか建前と目的が逆転していたのだ。

気づいた頃には遅く、胸の中で成長した恋の芽はすでに十分すぎるほどに成長し、なれない感情に自分が一番困惑してしまふ。

ついには、当の本人である綾崎くんにまで心配される始末。

他人のことに關しては目ざといヒナも多分気づいているだろう。

私はどうすればいいのだろうか。

「告白すれば？」

「簡単に言うな！」

そしてなぜ私はヒナと話しているのだろうか。

「えー。だってハル子はハヤテくんのこと好きなんですよ？」

「え、い、いや……それは」

ストレートに聞かれるとこっちが動揺してしまふ。

なぜヒナは、目の前の少女はそんなことを普通に言えるのか。

「……それはヒナだってそうだろう」

「え!! あ、いやー、そ、そうね」

「顔真っ赤だぞ」

あまりにも「女の子」な反応をとる、普段は完璧超人である友人が微笑ましくもなるが、問題はそこではない。

自分だって好きはずなのに、なぜここで私に告白してこいなどと言うのか。

「私は、綾崎くんが、その……す、す、……スキヤキ……なんだと思う」

「待ちなさい。今なにかおかしかったわ」

慣れていないのだから許して欲しい。

「だがそれは、ヒナもだろう？　なんで私の背中を押すようなマネを？」

「なにハル子。もしかして私が親友の恋一つ応援できない奴だとも思ってた？」

「だけど、同じ相手なのに」

「千桜」

声が遮られる。

雰囲気が変わった。

目の前にいたのは、女の子ではなく生徒会長である桂ヒナギクだった。

「そりゃあ、ライバルが増えるのは大変よ。ハヤテくんはかなりの鈍感だし。でもね、だからって相手の、ましてや親友の恋を邪魔する権利なんて誰にも無いと思う」

「ヒナ……」

綺麗事だ。

普通の人と言えば、だが。

でもヒナなら。

猪突猛進で頭はキレるのに考えるより体で動いて普段は自分の意見はズバズバ言うのに恋には凄く奥手なヒナがそれを言うのと、なぜかとも世界の真理みたいに聞こえるから不思議だ。

「でも、諦めたわけじゃないから。これからはハル子も私たちのライバルよ。——負けないから」

先ほどまでとは打って変わって、不敵な笑みを浮かべる目の前の親友に、もう私はなんの迷いもなく答えた。

「ああ。私もだ」

以上の経緯より告白することになった。

……あれ。

「そうね。ちょうどそのタイミングはナギとカユラは一緒に出かける予定だからいないし歩もバイトでマリアさんも買い出し。私もアリスを連れて出かけるようにするからハヤテくんに告白するならそのタイミングで」

「待て待て待て！　なんでそんな急に」

「嫌なの？」

「心の準備がそんな早くに出来るか！」
するとヒナは、えらく悟ったような顔で

「そんなもの無意味よ」

と言った。その顔はまるで、原作22巻あたりでステキなディナーをしながら隙を見つけては流れを引き込もうと画策するも全部失敗に終わってしまった女の苦勞……そんな哀愁を漂わせていた。

「だから、むしろ強引にでもここは言っちゃった方がいいのよ」

「ヒナ。本音は」

「いい千桜。原作でハヤテくんに好意を露わにしているヒロインは全員撃沈しているのよ」

「フラれると!? 親友の立場はどうした!」

「ええ。私たちは親友(ライバル)よ」

「恋敵(ライバル)の間違いだろう」

「冗談は半分くらいにして」

半分は本気なのか。

「どうせ千桜のことだし、私たちに遠慮でもしてるんでしょ」

「うっ」

遠慮もする。

西沢歩は一番早くに綾崎くんを恋をした。(※ハム沢より前にアテネと泉が恋していますが無論そんなことは千桜は知りません)

三千院ナギは綾崎くんを誘拐されるところを救われた。

(※実は誘拐犯より早くにナギを誘拐しようとしていたが、それはメイドと執事の秘密なので千桜は知りません)

瀬川泉は……好き、だよな。うん。(※ちよっと私も知りません。泉の恋って周知の事実なのだろうか)

水蓮寺ルカは綾崎くんと似た境遇でたくさん共有出来るものがあつた。(※特になし)

桂ヒナギクは今までいっぱいアプローチをしかけてきた。(※全部不発ですが千桜は知っています多分)

それなのに、それらを差し置いて気持ちを伝えるなんて出来るわけが無い。(※歩、泉、ルカ、ヒナギク、そしてアテネはすでに自分の気持ちを伝えてます。ナギもすでに済ませた気でいます)

「……いいのよ千桜」

「ヒナ」

「さっきも言ったでしょう。ライバルだって。だったら遠慮してどうするのよ。それに、一回告白したぐらいでOKもらえるならとっくに誰かが付き合っているから」

お前……。

「結局フラれること前提なのか」

「あれ。千桜さんだけですか」

「あ、ああ。みんな出かけてしまっただけ」

結局こうなるのか。

ヒナのお節介もここまでくると頭痛がするな。

「そうですか。では、僕は夕食の支度がありますので、

千桜さんもくつろいでください」

そう言ってキツチンへと消えていく綾崎くん。

くっ、チャンスだと言うのに！

(こういう時こそ落ち着くのよ)

はっ！ラブ師匠！

(急がば回れという先人が残した偉大な言葉にあやかるとよ。いきなり告白するのではなく、まずは雰囲気作りのための会話を切り出していきなさい)

なぜかヒナの顔が浮かんだ。なぜだ。

(大丈夫。あなたなら出来る。最後にこの言葉を預けるわ。

「奇跡も魔法もあるけれど、恋は叶わない」がんばって

どうしてその言葉を最後に送った!?

……消えた。

しかし、ヒントは貰えた。まずは会話だ！

……。なぜかヒナの顔が浮かぶ。

キツチンへと向かい、支度中のところを声をかける。

「なあ綾崎くん」

「なんですか千桜さん」

「好きな人っているのか」

綾崎くんの動きがピタッと止まる。

……。あれ。これ回ってない気がする。

「あ、いや。忘れてく」

「いきました」

……。

「フラれちゃいましたけどね」

その言葉は、その笑顔は、明るいはずなのに、どこか悲しげだった。

「……変なこと聞いた」

「いえ。でも、千桜さんもそういうのに興味があるんですね」

ピキッ。

「どういう意味だ」

「いえ。てつきりBLが好きなのかぐえっ！」

「綾崎くん。言っいいいと悪いことがこの世に存在するのを知っているか？」

「すいませんすいませんすいません！」

「しょうがなく手を離す。」

……。

「なあ」

「げほっ、げほっ、はい？」

「君と付き合いたい、という人がいたらどうする？」

「前に言いませんでしたっけ。まずは一緒に墓に入ってくれるかを」

「入ってくれる人がいたら？」

少し、強い言い方になった。綾崎くんは驚き目を見開く。

「それは……」

それ以上の言葉は続かなかった。

「わかりません」

「そうか」

私はどんな感情を抱いたのだろう。

悲しい？ 虚しい？

いや、そもそも私はなにを聞いていたのだろう。

私は……

「千桜さん？」

「あ、ああ。悪かったな。変なこと聞いて」

「いえ。いやー、僕、てつきり千桜さんが僕のこと好きなのかと」

ズキッ、と胸に痛みが走る。

それはわかってしまうからだ。

この言葉は、ハヤテくんが一瞬でも「春風千桜は綾崎ハヤテのことが好き」であることを理解したわけでは無い。ただ単純に、場を和ませようとした綾崎くんなりのジョークだからだ。

それがわかってしまうほどに、綾崎くんの声は普通だった。

だから、この思いを少しでも伝えるために、

「どうか。もしかしたら、本当に好きかもしれないぞ？」

私はそう言った。

「はは。ありがとうございます」

それでも、私の言葉は綾崎くんの心に擦りもしないらしい。

「綾崎くん」

「はい」

「女難の相が出てるぞ」

「なんですか唐突に!？」

「はは。じゃあな」

「あ、……もう」

萎えそうになる足を無理矢理に動かし、なんとか自分の部屋まで移動する。

目から溢れる熱いものは意識しなかった。

綾崎くんは元より恋愛などするつもりはなかった。

多分、優先順位がすでに決まってる、綾崎くんの中でそれは不動のものとなっているのだと思う。恋愛はかなり低い位置にあるのだろう。

私は綾崎くんのが好きだ。この気持ちだけは本当だ。

だけど、気づいてしまった。綾崎くんの気持ちを動かすには、それこそルカのように多少強引にでも行かなければならない。私には無理だ。

もし……もしも将来。綾崎くんの隣に立てる人がいたとしたら。

それは多少の不幸は物ともしない、それこそ神に見初められたような幸運を持ち、綾崎くんなみに高スペックで、なにより自分の思いをまっすぐに伝えられるほどの強い意志を持つ人だろう。

どんな完璧超人だ。

自分で想像して悲しくなってくる。

結局は少しでも凄いと思えるような人じゃないと、簡単に諦めてしまった自分のことが一生嫌いになってしま……そんな自分の弱い部分から少しでも目をそらしたいだけだった。

でも。

もし許されるなら。

少しでも長く――

「千桜ー。告白した？」

「いや。出来るわけないだろ」

「ええー！」

「なんだよ「ええー！」って」

「せっかく機会を作ってあげたのに」

「ほう？なら今度は私が機会を作ってやろう。今度はヒナが告白だな」

「あ、いや、それはー」

学校では見せない、年相応のその仕草に思わず笑ってしまう。

「嘘だよ。敵に塩を送るわけないだろう？」

「へえ。じゃあ、私も負けないから」

頑張ってくれ、と心の中で思う。口には出さない。

私はもう、恋を諦めたから。

あの寂しそうな笑顔を見たとき、私の中にあつた恋は、また別の形のものへと変えた。

見守りたいと思つた。

私じゃ綾崎さんの隣に立つ自信は無いけれど、少しでも長く、綾崎さんと一緒にいたいから。一步引いたところから、みんなの恋を応援しよう。

「みなさーん。ご飯ですよー」

「行くか。ヒナ」

「そうね」

春は風のように通り過ぎ、桜は咲いては散つてを繰り返す。

千回桜が咲く前に、私の春は来るだろうか。

それとも、今がそうなのだろうか。

胸に咲くこの気持ちを恋と呼ぶのなら、今この一瞬を大事にしよう。

満開の桜のようなこの気持ち。

春風千桜の恋は今はまだ、元気に咲き誇っている。

カードゲーム

著者：RIDE

「ええっと、これはここに置いて…」

秋葉原のアニメイト。春風千桜はいつものようにそこでアルバイトの最中だ。

現在、彼女は入荷してきた商品の仕分けを行っている。

「この商品はここで、これは…」

真面目に仕事をこなしている彼女だが、ふと手にしている商品に目がいった。

「これは…」

「カードゲームだね」

横から職場の先輩が顔を出してきた。手に持っている商品がなんなのかわからない千桜に、先輩は説明を始める。

「ちょっと好みが分かれるゲームだけどね、ルールは簡単で覚えれば誰でもプレイができるようになれるんだ」

そうですか、と答えて千桜は商品に目を戻した。どうやらそれが気になるみたいだ。

「気になるなら、カードを分けてあげようか？」

そんな彼女を見て、バイトの先輩はチャンスと感じた。

「僕もやっていて、余っているカードがあるからそれを

あげるよ」

「いいんですか？」

バイトの先輩は、快く頷いた。

「ありがとうございます！」

千桜の笑顔を見て、先輩は心の中でガッツポーズをした。そして、ゆくゆくは一緒にプレイをしたりしてと、妄想を加速させていた。

もっとも、そういうことにはならないのだが…。

「あー、退屈だな」

アパートでナギは部屋でだらりと寝転がっていた。

彼女には今やることがない。興味があることも、すべきこともない。何でも相手にしてくれるハヤテも今いない。一人きりであった。

「何か面白いことないかなー」

「そんなに暇なら、こいつで遊ばないか？」

そう言っ、バイトから帰ってきた千桜がナギの元へとやってきた。

「なんなのだ、それは？」

起き上がったナギは千桜の持っているものに興味を示した。

「カードゲームだ」

「カードゲーム？そんなもの見たことないぞ」

どうやらナギもこのカードゲームについて知らないみたいだ。それから察するにこのカードゲームはあまり知られてはいないのだろう。

「私も初めて見たんだ。ちよつと一緒にやってみないか？」

「えー、面白いのか？」

ナギは少し不審気味である。まあ、面白いという声を聞いていないのだから仕方がないのだろう。

「なんなら、対戦形式で教えようか？」

そう言って現れた人物に、ナギと千桜は驚いた。

「カ、カユラ！いつの間？」

音もなく姿を見せたカユラに、二人は戦いてしまう。

それを放っておいてカユラは話を進める。

「カードゲームの楽しさを味わうにはやはり対戦だ。その対戦の仕方がわかれば、自然と楽しくなってくるはずだ」

カユラがそう豪語するので、ナギも一応やってみることにした。

「そうか、じゃあ私も教わってみるか」

「カードやるよ。これがスターターと、後適当にブースターを選んでくれ」

千桜がスターターを差し出した。それを受け取ったナギは、次にいくつかあるブースターのパックから一つを選ぶ。

その中で、これを選べと直感みたいなものを抱いた。

自然と、ナギはそれに手を伸ばしていた。

手に取ったパックを、開けてみた。1枚ずつカードを取り出していき、最後の一枚。

「…これは」

「そ、そいつは！」

出てきたカードに、千桜とカユラは息を呑んだ。

「まさか、そのカードが出てくるなんて…」

「これが、どうかしたのか？」

カードの価値がわからないナギは、首を傾げるしかなかった。

「とりあえず、そのカードはおまえのスターターと相性がいいから、組み込んでおけ」

「わ、わかった」

とりあえず、言われたとおりに組むナギであった。

「さて、それでは対戦を始めるぞ」

最初はナギとカユラでやることとなった。初心者の方々にカユラが色々教えていく形で進めるとのことだ。

「先攻は私からいくぞ。いいな、ナギ」

「ああ」

熱意のこもった返事。やるからには勝つ。いつものナギの性格が表れている。

「まず、50枚のデッキから最初に場を出すファーストキヤラクターカードを伏せた状態で置き、残りは山札としてカードを良く切って置く。そして山札から5枚カードを引いて手札とする」

言いながら作業をするカユラ。ナギも彼女の真似をする。

「準備ができたな。では始めるぞ。場に出てあるカードを表にしろ」

二人は、一斉にカードを表にした。ナギの場にはシルフィードと書かれたカードが、カユラの場にはマンモと書かれたカードが姿を見せた。

シルフィード

エネルギー 15

1・疾風 5

2・羽 3

3・体当たり 1

種族…精霊

属性…風

マンモ

エネルギー 16

1・こおりづけ 5

2・ゆきだま 3

3・たいあたり 1

種族…モンスター

属性…氷

「先攻は私だったな。まず山札から一番上のカードを引き、最初に置いたキヤラカードを前衛に移動させなければならぬ」

キヤラカードを出す場には前衛と後衛が存在している。戦闘を行うためにはキヤラを前衛に出さなければならぬ。もちろん後衛にもちゃんと役割があるのだが、それは後で説明する。

「次に手札に他のキヤラカードがあるなら、それを場に出せる。但し、基本手札から出す場合は必ず後衛に出さなければならないんだ」

そう言って、カユラは手札からホシハッピーとプロトンというキヤラカードをそれぞれ1枚後衛に出す。

「そして攻撃。まずは攻撃するカードを良く見てくれ」

カードを良く見てみると、カード名とイラストの他に、テキストとして1、2、3の順に恐らくは技の名前と数字が書かれてある。

「攻撃は3つある技のうちの1つが繰り出されるんだが、それを決めるのはこの4面ダイスだ」

そう言って、カユラは4面ダイスを取り出した。

「このダイスを振って出た目の数と同じ番号の攻撃が繰り出されるんだ。カードに書かれていない4の目が出た時は、それは攻撃失敗になる」

説明した後、カユラはマンモの攻撃判定としてダイスを振った。

出た目の数は、3。一番低いダメージの攻撃だ。そしてマンモの攻撃3の値は1。

「3が出たから、マンモの攻撃は相手に1ダメージだな。攻撃を喰らったシルフィードは、エネルギーが1減ってしまう」

シルフィードのエネルギーテキストは最大値15。そこにマンモからの1ダメージを喰らってしまったので、残りのエネルギーは14となる。

「他に攻撃ができるキャラがないから、私のターンは終了だ。さあナギ、次はおまえだ」

「わ、わかった」

後攻のナギは、先程カユラが見せた通りの手順を行っていく。まずは山札から1枚手札を引く。

ナギの手札は現在6枚。その中で、場に出せるカードがいくつか存在した。

「私は後衛に、グルスイーグ、ヒューポ、バサラを場に出す。そして、前衛にいるシルフィードの攻撃」

ナギの振った4面ダイスが出た目は1。最大値の攻撃だ。

「シルフィードの疾風で、マンモに5ダメージ」
これによって、マンモの残りエネルギーが11となった。

「両者が攻撃を終わったら、再び先攻にターンが回ってくる」

2ターン目。カユラは先ず山札から一枚カードを引く。
「そして、前のターンで後衛に出したキャラは前衛へと進めることができる」

カユラの場合で後衛で待機していたホシハツパーとプロトンが前衛へ移動される。

ホシハツパー

エネルギー 20

1・このはブレード 10

2・チョップ 5

3・ほのお 3

種族…モンスター

属性…炎

プロトン

エネルギー 15

1・しよげきは 5

2・らくらい 3

3・エアカッター 1

種族…モンスター

属性…風

「逆に、前衛にいたキャラを後衛へと下がらせることができる」

そして、ダメージを追っているマンモを後衛へと下がらせた。

「後衛はこのようにダメージを受けてやられそうなキャラを戦闘から回避するのに利用できる。相手が狙えるのは前衛にいるキャラだけだからな」

つまり、次のナギの攻撃ではマンモは狙えないという

ことだ。

また、1キャラの移動は1ターンにおいて1回しか行えないので、注意しなければならないとのこと。

「さあ、ホシハッパー、プロトンで攻撃するぞ」

ナギの前衛にはシルフィードしかいないので、攻撃は全てシルフィードが受けることとなる。

攻撃判定は、ホシハッパーが2の目が出たので5、プロトンは3の目が出たので1と合計6ダメージを負うことになる。これによって、シルフィードの残りエネルギーは8となった。

続いてナギのターン。山札から引いた1枚のカードに目をつけるナギ。

これは使える。そう感じた。

「私は、シルフィードを後衛に下がらせて、後衛で待機しているグルスイーグ、バサラ、ヒューポを前衛に出す」

グルスイーグ

エネルギー 16

1・アイスブレス 5

2・アイスクロー 3

3・かみつき 1

種族…精霊

属性…風

バサラ

エネルギー17

1・しよげきは 5

2・エアカッター 3

3・ひっぱたく 1

種族…モンスター

属性…風

ヒューポ

エネルギー14

1・れいしよう 4

2・ひとだま 2

3・アイスタッチ 1

種族…モンスター

属性…霊

「さらに、最後に空いている1体分のスペースの後衛にユニアースを出す。そして、ユニアースの特殊能力を使う」

ユニアース

エネルギー15

1・ホーンアタック 4

2・キック 3

3・たいあたり 2

特殊能力

1ターンに1回だけ、後衛にいる味方一人のエネルギーを最大5回復させることができる。

種族…精霊

属性…土

「対象はシルフィード。これによって、シルフィードのエネルギーは11となる。そして前衛にいる3体は皆、プロトンに向かって攻撃」

グルスイグの出た目は4で失敗、バサラは逆に1で5ダメージ、ヒューポは2で2ダメージとプロトンには合計7ダメージを与えた。

「プロトンは残り8ダメージか。少々きついかな…」

だが、そんな言葉とは裏腹にターンが回ってきたキュラはまだ余裕があった。

「カードはキャラ以外にもいくつか種類があるその内の一つが、このアイテムカードだ」

そう言って、手札から1枚カードを取り出した。

あまいみつ

場にいるキャラ一人のエネルギーを最大5まで回復させることができる。回復させた後、このカードは捨て札置き場へと移動する。

「このカードによって、プワトンのエネルギーが5回復する」

つまり、プワトンの現在のエネルギーは13となったのだ。

「さあ、攻撃だ。標的はヒューポだ」

プワトンの攻撃はエアカッター、ホシハッパーの攻撃はこのはブレードと、合計11ダメージ。ヒューポの残りエネルギーは3となってしまう。

後一撃でやられてしまう。だというのに、ナギはヒューポを後衛に下げてもりはなかった。

ホシハッパーは少々強い。あれを倒すためには前衛には最低3体が必要だ。それに、ヒューポの特殊能力は倒されたときにしか使えない。

山札からカードを引くナギ。彼女はまたいいカードを引いていた。

「私は前衛後衛の移動は行わない。そして、バサラをバサラングへと進化させる」

進化は、前衛後衛関係なく場にいるキャラでしかない。攻撃前のみ可能で、攻撃後は進化を行うことができない。

バサラング

バサラから進化

エネルギー23

1・きゆうこうか 11

2・しょうげきは 6

3・かみつき 3

種族・モンスター(進化)

属性・風

「そして攻撃だ。バサラング、プワトンに向けて攻撃」

4面ダイスの結果は、1。

11ダメージの必殺技、きゆうこうかがプワトンに当たった。プワトンの残りエネルギーは2。

「続けて、グルスイーグの攻撃」

4面ダイスの判定は、2。グルスイーグの2による攻撃はアイスクローでダメージは3。

「残り2エネルギーしかないプワトンは、この攻撃でエ

ネルギーが0となってしまったか」

カユラは少し悲しそうにしながらも、戦闘不能となったプロトンをダメージゾーンへと移す。

「このように戦闘不能となったキャラはダメージゾーンへと移される。先にこのダメージゾーンへ5体埋まってしまう方が負けとなるから、気をつけるんだな」

カユラのダメージゾーンに1体移ったことで、彼女は後4体キャラを倒されれば負けということとなる。

残り4体も必ず倒して、勝つてやる。ナギはそう燃え、カードを切る手に力を込めた。

「まだヒューポの攻撃が残っている。ターゲットはホシハッピーだ！」

ヒューポの攻撃ではこのターンで倒すのは無理だ。それでもホシハッピーは強力だから少しでもダメージを積みまなければならない。

「私の番だな。ピカポチとウンチンボーヤを後衛に出して、マンモをマンザラスに進化させる！」

マンザラス

マンモから進化

エネルギー 22

1・ふみつぶし

11

2・こおりづけ 6

3・くしざし 3

種族…モンスター(進化)

属性…氷

「ホシハッピーの攻撃。ターゲットはヒューポだ」

残りエネルギーが少なかったヒューポは、ホシハッピーの攻撃をしのぎきれず戦闘不能となってしまった。ナギのダメージゾーンにも1枚置かれてしまった。

「負けんぞ！次は私だ！」

ナギとカユラは互いに攻防を極めていた。

このゲームの難点。それは攻撃の値はダイスで決めるため、戦局が運によって大きく左右されることだ。

現に二人もその後はダイスの目があまり恵まれておらず、長丁場となっていた。しかし、それに比例して二人のボルテージもヒートアップしていた。

そして。

「前衛にいるバサランゴを、バサディアンへと更に進化させる！」

バサディアン

バサランゴから進化

エネルギー 35

1・きゆうこうか 20

2・ハウリング 15

3・さいみんこうせん 8

種族…モンスター(進化)

属性…風

「さらに、あまいみつを2枚使う！バサランゴの時に蓄積されていたダメージも、これで全快だ！」

「2段階進化キャラがそのデッキの中に入っていたなんて…」

これはカユラの誤算であった。2段階進化キャラはこのカードゲームの主力の一つでもある。カユラのデッキは対初心者用。2段階進化モンスターを入れてはいない。

「バサディアン¹の攻撃！ターゲットはホシハッピーだ！」

これまでのダメージもあり、尚且つ自身よりも強力なモンスターの攻撃を喰らいホシハッピーは戦闘不能となった。

現在の戦況はこうなっている。

カユラは、ダメージ3。前衛にはヒューポ、ピカポチ、ウンチンボーヤ。後衛にはマンザラスがいる。

ピカポチ

エネルギー 15

1・ハウリング 5

2・かみつき 3

3・シャイニング 1

種族…モンスター

属性…光

ウンチンボーヤ

エネルギー 16

1・きゆうしよづき 5

2・ハリセン 3

3・いしなげ 1

特殊能力

攻撃がハリセンとなった場合、4面ダイスを振って1が出ればダメージが2倍になる。

種族…モンスター

属性…土

マンザラスが控えているとはいえ、カユラ²の場には到底バサディアン³に対抗できるモンスター⁴がない。

対して、ナギのダメージは現在2。前衛には目立っているバサディアンがいて、後衛にグルスイーグ、シルフイード、そして2体の回復役であるユニアース。ターンを重ね、グルスイーグとシルフイードのエネルギーを回復させている。

状況は明らかにキュラが不利であった。

「どうだキュラ、このままいけば私の勝ちだ」

バサディアンという存在がいるからか、ナギは自信満々な態度である。

「ふっ、甘いな」

しかし、キュラにはまだ勝算があった。

「バサディアンなど、倒せないわけじゃないさ」

山札からカードを引くキュラ。そのカードを確認した時、彼女の口角が吊りあがる。

「ちようどいいカードが来たな」

そんな彼女はナギに向かって説明する。

「後衛の利点は、戦闘から回避するだけじゃない」

そう言い、手札から1枚のカードを取り出す。

「キャラにカードを装備させることができるのも、後衛でしかできない」

そのカードを、後衛に唯一いたマンザラスに装備させた。

スキルパック 10

モンスター専用装備

このカードを装備したモンスターは、エネルギーの最大値分相手にダメージを与えることができる。ダメージを与えた後、モンスターはダメージゾーンへと送られる。

「これって：自爆ってことか!？」

ナギは驚愕した。装備カードが存在していることに加え、自分を犠牲にして相手に大ダメージを与える効果があるなんて思いもなかったのだ。

「スキルパック 10を装備したマンザラスを前衛へと移動」

そして、キュラの猛攻が始まった。

「マンザラスに装備したスキルパック 10の効果発動！マンザラスをダメージゾーンに送るかわりに、マンザラスのエネルギー最大値分バサディアンにダメージを与える！」

マンザラスのエネルギー最大値分ということで、バサディアンには22ものダメージを受けることになった。

これは結構痛かった。バサディアンの残りエネルギーは13。しかも、キュラの前衛にはまだ攻撃を行っていないキャラが3体もいる。

もし残りの3体の攻撃が全員1、ウンチンボーヤのみが2のハリセンだったとしても特殊能力判定で成功が出たらこのターンでバサディアンが倒されてしまうかもしれない。

しかしバサディアンはなんとか耐え抜いた。ヒューポの攻撃は1の4ダメージ、ピカポチも1の5ダメージが出たが、ウンチンボーヤの攻撃は3の1ダメージが出て合計10。エネルギーが3残って終わった。

「私のターンだな」

ホッと息をついたナギは、山札から1枚引いた後、まずは手札からワイステインを後衛に出す。

続いて手札からエネルギーを10回復させるあまいみつを出す。効果の対象はもちろんバサディアンだ。

「回復をしたか。だがこのゲームは同名のカードは4枚までしか入れられない。4枚目を使った以上、もうおまえの手札にあまいみつが来ることはない」

ナギのデッキの中で、回復効果のあるアイテムカードはあまいみつ4枚のみ。ナギにはもう、アイテムによるエネルギー回復の手段はとれなくなったのだ。

バサディアンを後衛に下がらせ、ユニアースに回復してもらおうという手もあったが、そんな必要はないとナギは楽観視していた。キュラのダメージは4。後1体倒せ

ば自分の勝ちだ。バサディアンならば一撃で倒せるし、そうでなくてもシルフィードたちで十分倒せるだけのダメージを与えてくれるはずだ。

そんなナギが振ったバサディアンの攻撃判定のダイスは……

「よ……4だと!？」

なんと、攻撃失敗の目である。

「こ、ここにきて……」

愕然とするナギ。こんなところでダイスに嫌われるとは思ってもしなかった。

だがまあいいとナギはそんなに気にはしてなかった。キュラの場にはまだあの3体しかない。また先程のように踏ん張れるはずだ。

その後、シルフィード、グルスイーグと立て続けにヒューポに攻撃を行い、次のターンで倒せるところまでダメージを与えた。

だが、キュラの攻勢はここからが本番だった。

「キャラカードには条件を満たさないと場に出せない特殊なカードが存在する」

キュラの目から発してきた威圧感に、思わずナギはたじろいでしまう。

「私のダメージが4になった時、このカードは場に出せ

る。これが、そのカードだ！」

カユラが後衛に出したカード。それは：

トール

エネルギー 55

1・奇跡の力 25

2・勇者の力 20

3・パンチ 15

このカードは自分のダメージゾーンに4枚ある時にしか場に出せない

特殊能力

自分の場にモンスターがいる時、モンスター1体においてこのキャラの攻撃力が+5される。

種族…勇者

属性…光

「な、何だこのカードは!？」

ナギも千桜も、トールに注目してしまふ。

「窮地に陥った時に姿を現すこのカード。私の切り札だ」

圧倒的な能力である。だがまだ後衛にいる。このターンではまだ攻撃ができない。バサディアンさえしのぎきつてくれれば：

「更に私は手札から、サポートキャラである時の老人を出す！」

サポートキャラカード。通常のキャラカードと違い闘いは行わず、アイテムカードのように何かしらの特殊な効果を発動させる。

そして、カユラが使った時の老人とは：

時の老人

このカードを出したターンに、手札から後衛に出したキャラがいれば、そのキャラ1体を前衛に移動させる。効果を発揮した後、このカードは捨て札置き場に置かれる。

「そ、そんな！」

これによって、トールは前衛へと移動した。手札から出したそのターンで攻撃を可能にするカードが存在したなんて。

「ヒューポ、ピカポチ、ウンチンボーヤは後衛に移動」

モンスター3体を下がらせたのはトールの能力を安定させるためと、1体でも倒されたらカユラの負けになるために戦闘回避するためであろう。前衛はトール一人だけだが、それでも十分以上に任せられる。

「さて、バサディアンに攻撃」

カユラは4面ダイスを振った。1、2、3のどれかが来てもバサディアンは倒されてしまう。ナギは4が出ることを祈っていた。

しかしそれもむなしく、出た目は2。

バサディアンはダメージゾーンへと送られてしまった。

「ま、まだ私のダメージゾーンは3体だ！まだいけるぞ！」

そう豪語するが、ナギの場にはトールに対抗できるキヤラは存在しない。

「まずはシャーグインとワイステインを後衛に出す！」

少しでも場にいるキヤラを多くして攻撃の手数を増やそうという意図だ。だがこの2体が戦闘に参加できるのは次のターンからだ

「さらに、シルフィードとユニアースに勾玉を装備させる！」

勾玉

精霊専用装備

装備した精霊は攻撃力が+3される

「シルフィード、ユニアースを前衛に！」

ユニアースでちまちま回復をやっても無意味だと感じたのだろう。ならば、回復役も攻撃に回した方が得策だ。

「シルフィード、ユニアース、グルスイーグで攻撃！」

勾玉を装備させて、できる限り攻撃力を高めてトールに攻撃した。

勾玉を装備したシルフィードは2の3+3の6ダメージ、同じく勾玉を装備しているユニアースは3の2+3の5ダメージ、グルスイーグは3の1ダメージと合計12のダメージを与えた。

だがそれも、焼け石に水でしかなかった。トールの残りエネルギーはまだ43もある

カユラにターンが回ってきた。

「まずは、あまいみつ2枚でトールのエネルギーを全快させる」

折角与えたダメージも回復され、ナギは悔しさに顔をゆがめた

「トールの攻撃。ターゲットはユニアースだ」

攻撃判定は当たり。ユニアースはダメージゾーンに送られ、4体が埋まった。

後1体倒されればナギの負けだ。それにはこのターンでトールを倒すしかない。しかし、トールに対抗できるキヤラは今のナギにはいない。ナギは悔しそうに唸って

いる。

「おい、もうちょっと手を抜いたらどうだ」

見かねて、千桜がカユラに耳打ちしてきた。

「初心者なんだから、そんなに追い詰めなくても…」

「この状況をひっくり返すカードが、ナギのデッキには存在している」

千桜は目を丸くする。そんなカードなんてあったか？

だがカユラは平然としている。

「そのカードを、ナギが引けるかどうかだ」

ナギにとって、これがラストとなるターンだろう。

半ばあきらめ半分で山札のカード引いたナギ。

そのカードを見て、確認した後ナギに希望が見えてきた。

このカードなら…

「まず、後衛にいるシャーグインとワイステインを前衛に出す」

シャーグイン

エネルギー 16

1・ウオーター 4

2・ひれブレード 2

3・とっしん 1

種族…精霊

属性…水

ワイステイン

エネルギー 15

1・ウイングトルネード 5

2・はねアタック 3

3・くちばし 1

種族…精霊

属性…風

「そして、シルフィードを人型形態へと進化させる！」

シルフィード(人型形態)

シルフィードから進化

エネルギー 20

1・疾風怒濤 10

2・疾風 6

3・格闘 3

種族…精霊(人型形態)

属性…風

「まだ、進化できるキャラがいたのか…」

それでも、トールの能力には遠く及ばない。

「そして、私はこのカードを場に出す！」

龍鳳

エネルギー 60

このカードは攻撃を行わない。

このカードは自分のダメージが4の時に場に出せる。

次の自分のターン、このカードは捨て札置き場へ置かれる。

特殊能力

自分の場に種族…精霊のキャラがいるならそのキャラの攻撃力が+10される。

自分の前衛にいる種族…精霊に攻撃が当たった時、このカードがかわりにダメージを受けることができる。

自分の前衛に3体がいって、それぞれの攻撃判定の目が3、3、4の順になった場合、4を出したキャラは1の目の攻撃値の2倍のダメージを攻撃として相手に行う

「そのカードを引き当てたか」

これこそ、ナギが先程ブースターで当てたカードであ

る。

「精霊1体に攻撃力+10!?!とんでもない破壊力だ！」

千桜の驚きも無理はない。場に出せるキャラは5体まで。1体は龍鳳で埋まるとしても、他の4体の種族が全て精霊で前衛にいるなら、最低でも40ダメージを確実に与えることができる。しかもナギの場には、人型形態へと進化し勾玉を装備したシルフィードがいる。

これならば、1ターンでトールを倒せるかもしれない。

「いくぞ!まずはシャーングインの攻撃!」

シャーングインの攻撃判定は2。キャラ自体の攻撃力2にプラスして10で合計10ダメージ。

「続いてワイステイン!グルスイーグ!」

ワイステイン、グルスイーグ両者とも3が出て、龍鳳の加算分を合わせて11×2の22ダメージ。

現在、トールのエネルギー値は22。人型形態シルフィードの射程圏内に入った。

「そして、シルフィードの攻撃!」

勝敗を決めるダイス。

誰もが固唾を呑む中で、出てきた目は…

「…4、だと…」

攻撃失敗の目だ。ナギは落胆してしまう。ここにきて、ダイスに見放されるなんて…

「そ、そんな…」

「いや、待て！」

うなだれているナギを、千桜が呼び止める。

「龍鳳の特殊能力がまだあるぞ！」

言われて、龍鳳の特殊能力をもう一度確認する。

自分の前衛に3体がいて、それぞれの攻撃判定の目が3、3、4の順になった場合、4を出したキャラは1の目の攻撃値の2倍のダメージを攻撃として相手に行う

人型形態のシルフィードの1攻撃はダメージ10。

その2倍ということは、ダメージは20になる。

更にシルフィードは現在、攻撃力を3プラスさせる勾玉を装備しているので：

「シルフィードの攻撃は23！トールの残りエネルギーを上回った！」

これにより、トールは戦闘不能となる。そして、トールはダメージゾーンへ送られ：

「私のダメージゾーンが5体埋まったな…」

カユラは自分のダメージゾーンを確認する。

「私の負けだ」

「勝った…？勝った…勝ったのだな！」

カユラの敗北宣言に、最初は呆然としていたナギだったが、すぐに喜びを大きく露にする。

「やった！勝ったぞ！」

「やれやれ、あんなに喜んで…」

千桜は困ったように笑う。やる前はあんなにやる気になかったというのに：

「カユラだって、本気だったわけじゃないのに…」

「いや、本気さ」

カユラが発したその言葉に、千桜は首を傾げる。

「でも、それは対初心者用のデッキだろ？」

「だからと言って手を抜いたわけじゃない。対初心者用なら安心して本気を出せるからな」

相手の実力に合わせたデッキなら、手を抜かなくても相手に合わせた闘いができる。デッキの方が手加減してくれるということだろう。

「それに、手を抜いたりなんかしたら、負けていい気分になんかならないさ」

そう。負けたというのにカユラはすがすがしい気分だった。この戦いに全力を出し切ったからこそ悔しさなんてにじみ出てこないのだ。

「そうか」

千桜も納得したようだ。

「おい千桜！次はおまえとやるぞ！」

デッキを突き付け、ナギは千桜へと挑戦する。

「ああ、いいぞ。私も初心者だから、いい勝負になると
思うぞ」

カードゲームは、みんなで楽しくやるもの。

ナギは初めて、その楽しさというものを実感するので
あった。

著者あとがき & メッセージ

【春樹咲良さん】

止まり木合同本読者の皆さま、初めまして。春樹咲良と申します。
ようやく合同本に掲載する機会が得られました。

というわけで今回は短めのお話ですが、本編で泉サイドが描かれていたVS『夏休みの敵』の、美希・理沙サイドという位置づけになります。

自分でも予測不能な方向に話が逸れて行く会話を一つの話にまとめるのは、楽しくもあり、大変でもありました。高校のときの夏休みの宿題は、あらかた無視していたタイプの人間ですが、友人たちと雑談の方に熱中しながら一緒に宿題をやるといいうのも、それはそれで楽しかったのかも知れないなあとその歳になってみて感じます。

ていうかもう高校生っただけで尊いよ、人生の貴重な時間だよ、という話で。いやはや、歳は取りたくないですね。本編の方は未だに終わらない夏休みを続けていますが、彼女たちの残りの夏休みが崩壊しないことを祈るばかりです（そういえば、夏休み最終日まで宿題が終わらなかった泉サイドを描いた双剣士さんによるSSが、第5回合同本に収録されていますよ）。

ついでにSSの内容に関連して、よく「ニュートンはリンゴが木から落ちるのを見て、重力の存在を閃いた」という逸話を聞きますが、実はこれはとても不正確というか、完全に誤解です。

えー、そもそもニュートン力学というのは……みたいな話をするにはあとがきのスペースでは全然足りないので、

詳細は割愛します。

気になった方はグーグル先生に聞いてみよう。

ところで、実はこのお話は小説掲示板の方で連載している拙作「離れていても働くチカラ」

(<http://soukenshi.net/perch/hayate/subnovel/read.cgi?no=346>)のちよっとした伏線になっています。

本編の二十年後というアレな時間軸を描いた作品ですが、もし興味を持っていただけましたら、そちらの方もご一読下さると嬉しいです。

それでは、このような機会に恵まれたことに感謝しつつ、またいつかどこかでお会いしましょう。

春樹咲良でした。

【羊田。ペンタさん】

どうもこんにちは、羊田ペンタです。

今回のネタは一応合唱コンということでした、一応。とくにこれといった思い出がある訳ではないのですけれど。まあエヴァ最終巻出たなと考えるとときに思い付いたんですけど。というかあのセリフを入れたかっただけです(笑)読みづらく、何が言いたいのかわからないものになってしまいました。楽しんでくれる方がいれば幸いです。ま今回はここらで失礼します。また機会があればよろしくお願いします。

【ロッキー・ラックーンさん】

にやんばすー、RRです。最近めつきり寒くなってしまつて、朝起きるのが正直つらいです。布団が好きだから…。

とまあ旬な野球ネタはここまでにしておいて、第6回合同本の発行おめでとうございます。前回のクイズ大会では残念な事に優勝を逃してしまい、非常に悔しい（でもry）思いをさせて頂きました。なので今回は油断や慢心を捨てて初心に帰った気分です。そういう点では、前回優勝のTETさん感謝です。そして初のまともな参加となったはるさく氏、非常に強力なライバルでした。やはり88年会は凄し。管理人さんの初の試みとなるイントロクイズも、とても楽しかったです。「頭に入ってる曲は最初の1音で判別できる」とかいうムダ能力が初めて役に立った場面となって嬉しかったです。

そんなこんなで掲載権を頂いた作品、ほぼ処女作になります。「ほぼ」の意味はお察しく下さい。まるまる3年以上前に元祖ひなゆめで投稿したもので、アリスちゃん愛が芽生えてなかった当時の非常に懐かしくなりました。初めての作品という事で、書きたい要素をとにかく詰め込んだ印象があります。

その中でも特に「歌」から物語の内容を練り出しています。あいあい傘のシーンはそのまま「あいあい傘（伊藤静さん「Present「より」」、ハヤテとヒナギクの会話、帰り道の雰囲気、告白に至るまでのモノローグは「Heart of Flower（桂ヒナギク「HINA「より」）」と、伊藤静さんの声さまさまな作品である事は、当時も今もさして変わっていませんね。大好きなんです（迫真

告白に対しての結末に関しては、特に記述する事はございません。皆様のたくましい想像力で補ってあげてください。

最後に、挿絵を描いてくださったピーすけさん・タツキーさん本当にありがとうございます。それでは失礼いたします。またのご機会があればお会いしましょう。

【タッキーさん（挿絵）】

どうも、タッキーです。

自分がSSを書き始めたのにはロッキーさんの作品の影響が大きかったので、今回の話を聞いたときには真っ先に挿絵を描くことを決めました。ロッキーさんからはアドバイスなども貰ったりしてとてもお世話になっているので、少しでもお役に立てたらなあ、と。自分なりの感謝の気持ちです。ロッキーさん、これからもお互いに頑張っていきましょう！

それからこの絵を描いていて思ったことなのですが、ハヤテが・・・すごく難しい（涙

それでは

【ピーすけさん（挿絵）】

ロッキー・ラックーンさんのピュアな小説に僭越ながらイラストを贈らせていただきました。雨上がりということでも明度高めの塗りに（単に厚塗りやギヤルゲ塗りが出来なかつただけとも言います）少しでも素敵な小説を引き立てることが出来ていれば嬉しいです。

【kullちゃん】

こんにちは。kullです。最近格ゲーにはまっています。

何回目か忘れましたが、今回も合同本に参加させていただきました。

気づいた人もいるかもしれませんが、今回の話は自分が一番好きな26巻の表紙から作りました。ハヤテの単行本の表紙って、本編とは関係ないワンカットだけつくられてて、SSを作るのに最高の素材なんじゃないでしょうか。既出ならすいません。

ちなみにぎりぎりまでモチベーションが上がらなくて大変でした。

作中で千桜がとった本は「龍神の雨」っていう実在の本です。ステマです。面白かったので興味があったら是非どうぞ。

【torbion やん】

どうもこんにちは。普段はチャットの方で楽しくやっています、torbionです。

今回はハヤテのごとく連載10周年や止まり木開設2周年等、色々なことのある時の合作本…後書きという形でこの場にいることを嬉しく思います。

今回の合作本はどの作品も楽しめる(はず)と思うので、もう一度ゆっくりと、時間のある時に読んでみてはいかがですか？

【ネームレスさん】

どうも。今回torbionさんから権利を貰いまして今回書くことになりましたネームレスです。

この小説を書くにあたり、torbionさんからリクを聞き、その中であつたハヤテ×千桜の組み合わせを見たときこんな物語を思いついて書いた所存です。

……いやー、千桜難しいね！ 普段あまり書かないキャラでけっこう大変でした。

でも、こういった場で作品を書けるというのはやはりとても嬉しいですね。まあ、俺は譲ってもらった立場なんですけど(汗)

いつかは自力で掴み取りたいものです。

それでは、このようなイベントを用意していただいた双剣士さん、権利を譲っていただいたforbionさん、そして止まり木民全体に感謝をして締めさせていただきます。

……あれ。上から目線だな。

【RIDE さん】

どうも、RIDE です。

いかがだったでしょうか。

今回はもう、落とすかもしれないとばかり思っていました。

クイズ大会で合同本の権利を得て、11月の第1週で大体のプロットが完成。

後は締め切りまでじっくりと話を煮込んで完成させよう。そんなはずだったのに…

会社の仕事の関係で第2週、第3週、第4週と休出の連続。

ゲーム企画の方も両立させなければならぬ。

ダブルで追い込まれ、執筆に手がつかず気づけば残り1週間の時点で2ページ分しかできていない！

そんな状況の中で、なんとか書きあげたこの作品。

もうちょっと物語として何か書きたかった感もしますが、限られた時間の中ではこれが限界でした。

すみません…

今回の話は、ゲーム企画第2話をバックホーンとしています。

ゲームの展開と、カードゲームの展開とは違いますが、そこは媒体が違うということで解釈してください。じつは、このカードゲームは中学時代に私が考えたもので、現在のゲーム企画の元となったものです。

トレーディングカード風に描いたイラストが元となってカードゲームになり、そして現在チャットを利用としたゲームとなっている…

不思議な感じがします。いい意味でも、悪い意味でも。

なににせよ、楽しんでいただけたら幸いです！

ゲーム大会の方もよろしく！

編集後記

前々回の合同本のあとがきで「単行本を使い切ってしまったので、クイズ大会は第4回が最後」と書いたはずでしたが、ハヤテのごとく連載10周年に合わせて第6回のクイズ大会を開催してしまいました。今年春に「もうこれでクイズ大会は最後なんですよね？」と念押しして引退していった○○○○さんには申し訳ない気持ちでいっぱいですが、しかし41〜42巻の2冊だけでも意外と問題は作れるものだということが分かりましたので、また定期的をやっていきたいと考えています。(ペースは年2回に減りますけど)

それにしても今回の合同本、並べてみると驚異の千桜率！ 6話中2話で主役・2話で準主役という大活躍ぶりを春風千桜が発揮してくれました。アニメイトの姫の人気っぷりは突出していますね(おなじオタショップ店員でも、西沢さんは影も形も出てこなかったというのに……)。さまざまな作者が異なる千桜像を描いてくれますが、すべてが正解というか同居しているように感じられるのは、私の気のせいでしょうか？

次回のクイズ大会は3月後半ごろを予定しています。しかしクイズ大会としては12月末の第2回ワイ杯が、合同本企画としても年末のクリスマス合同本が控えているようです。年が明けたら第3回Webラジオ企画も始まるし……体調を崩さないよう気を付けながら、皆さん一緒に頑張りましょう！

奥付

書名…ひなゆめファンの止まり木・合同小説本 Vol.06

発行責任者…双剣士 (<http://soukenshi.net/mail/>)

発行日…2014年11月30日